伊能図は米国にあると信じていた

旅行の最終日、アポなしで図書館へ。学芸員が運んできた地図の中に、それらしい束が…

渡辺　一郎

ふとした機縁で伊能図に魅せられ、内外の伊能図探索をはじめてから二十数年になる。伊能図はときどき、予想外の場所から現れて人々を驚かす。アメリカの伊能大図写し二百六枚は予想外の大発見だった。

私の海外伊能図探しは、幕末の一八六一年に英国の測量艦隊に渡されたグリニッジ海事博物館蔵の伊能小図の調査に始まる。書物には英国に存在するとあるが、いまも実在かどうか不明なので、一九九四年に旅行中、日程が空いたので訪問したが見事に門前払い。学芸員の名前だけを聞いて引き揚げた。帰国後、お金を払ってカラーポジを入手。これでやっと英国小図の存在が確認できた。

この図はあとで、江戸東京博物館の「伊能忠敬展」に招聘（しょうへい）、百三十七年ぶりの里帰りとなる。

九五年三月には、新聞の記事をよりどころにして、家内を助手にして、フランスに伊能中図を調査に行く。見事な内容に感心し、十月には忠敬の出身地・佐原（千葉県）へ一時里帰りさせることに成功した。

フランス中図の縁で、伊能家と知り合い、忠敬ファンの多さに驚いて、伊能忠敬研究会を発足させることになった。

そのあとで調べにいったのはイタリアの伊能中図だった。話は事前に聞いたが判断できないので出かけることにした。助手は家内。

百聞は一見にしかず、広げてみたら、学習院大学にある伊能中図をそっくりカナ書きに直したものだった。学習院図は最終本ではなく、途中段階の伊能図を八枚寄せ集めたものである。幕末に日本に駐在したイタリア領事のロベッキーが収集した日本図の一部であるという。

イタリアはこの時期まだ統一国家になっていなかった。日本在留イタリア人も十数人だったらしい。何のことはない、領事ではあるが情報収集が主な役目だったようである。

そこで思ったのは、イタリアですら伊能図を集めている。アメリカと地図先進国のロシアには無い筈はないということだった。

アメリカに伊能図は必ずある。それを三年ばかり言い続けてきた。NHKラジオの国際放送に出演して英語で放送したり、国際古地図コレクター協会で呼びかけたり、インターネット好きの会員にホームページ探しを頼んだりしてきた。

ところが、なかなか伊能図らしき図は出てこなかった。自分で探すしかないな、と思い始めていたところ、今年三月にアメリカを旅行する機会があり、時間が取れたので最終日に議会図書館にチャレンジして、初めからバッタリ出会ったから奇遇である。

アポなしの言わば飛び込みなので、ホテルで探索条件を記したメモを作って出かけた。わからないことが多いだろう。やり方だけでも分かれば上々という程度の気持ちだった。

予想したように、まごまごしたが、地図室で学芸員のシャロットさんに出会う。

メモを見て、シャロットさんはいちいち、うなずいて書庫に消えた。

しばらくすると、日本の古地図をたくさん抱えて出てきてくれた。何回もの持ち出しにいやな顔をせず、よくやってくれた。

あとで調査団に加わった日本の国会図書館元課長の鈴木純子さんは、自分の経験から、真剣な探索者は会えばすぐわかるといっているが、このときの私と家内の態度に何物かを感じてくれたのかもしれない。

やがて運ばれてきた一群の地図のなかに、それらしい二十枚ばかりの束があった。はやる心を抑えて束を開く。

予感どおり伊能大図写し（北海道の部）だった。表題も図番もほぼ符合する。このグループの地図すべてをもってきてもらい、積み上げると、約二百枚だった。しかし、とても二人の手にはおえない。数量を数え、数枚を開いて内容を精査して写真を撮る。この図の価値と他日の再調査を知らせて引き揚げた。約二・五カ月後調査団として全数の内容を確認した。

この図は大発見であるが、明治以降の流出である。私はこの他に幕末の流出図がまだあると思っている。

（わたなべ・いちろう＝伊能忠敬研究会代表理事）

文化